



47号 令和6年7月24日

<学校教育目標>

自ら伸びる ともに伸びる

校長だより

呉市立阿賀小学校
安宗 誠



学校で学ぶ訳を質問されたら…

子供から、「なぜ、学校に行かなければならないの？」と質問されたことはないでしょうか？そんなとき、どう答えれておられますか？親としての信念に従って答えれば、それでよいのでしょうか、ある学者の説が目にとまりましたのでご紹介いたします。

「あるとき、今のアフリカあたりに、これまでなかったほどの巨大地震が起こりました。・・・そのとき隆起した山の間が陥没して平原になりました。山には風が吹きつけ上昇気流となって雨が降りその山を豊かな森に保ちました。しかし、陥没した平原には雨が降らず、からからのサバンナとなりました。そこにいたサルたちは、それまでは木に登り遠くを見渡しえさを見つけたりしていましたが、からからの草原になってからは、それができなくなりました。その結果、いつしか、遠くが見渡せるように4本足から2本足になって立ち上がるようになりました。すると、背骨で重くて大きな脳を支えることができるように進化し、人間になったのです。ところが、2本足で立ち上がったことで骨盤が70%狭くなり、頭の大きな赤ちゃんを産めなくなり、自然分娩ができなくなりました。そこで、人間は未熟児のまま子供を産まざるを得ない宿命を負うこととなりました。サルは生まれたばかりの赤ちゃんでも、自分で立ち上がってお母さんのおっぱいを飲めますが、人間の赤ちゃんはお母さんのサポートなしでは何もできません。つまり、すべての哺乳類の中で、教育されなければ一人前になれるのが人間なのです。だから、学校があるのです。だから、学校で学ばなければならぬのです。」

これは、佐治晴夫氏（理学博士・東京大学物性研究所等教授・JAXA 宇宙連詩編纂委員会委員長等を歴任）のお話です。（佐治晴夫他著『人はなぜ、同じ過ちを繰り返すのか？』清流出版）

このような見方・考え方もあるんですね。